

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-521-8494

時はさまざまの人間を超えて流れる。その谷間に生きる人間の、それぞれのドラマは決して同じではない。一人の人間と出会い、記録していくとき、ふと人間の素顔、歴史の事実を垣間見ることができて私はどきりとす。

そのどきどきするような瞬間に魅せられて私はいくつかのドキュメンタリーを作ってきた。

安らかにおねむり下さい。
あやまちは繰り返しませぬから

昭和20年8月6日の広島に、8月9日の長崎に、日本は大量の無残な死者を出した。生き残ったものは天を仰ぎ、地に伏して「人間を返せ」と懺悔した。ちちをかえせ ははをかえせ わたしをかえせ わたしにつながらる にんげんをかえせ

広島島の焼け野原に立った時三吉は「人間をかえせ」と叫んだ。それが彼の終生のテーマとなった。

志を持つ人々へのエール

磯野 恭子

どんな文芸作品でも芸術作品でもそのうであるが、ドキュメンタリーもまた、つくり手である制作者の人生を超えることはできないと思う。「平和」は私にとって永遠のテーマとなった。

私は広島で生れた。

昭和16年に太平洋戦争がはじまる。物のない時代であった。食べ物もちろん、言論・出版の自由も、生きる上での自由さえも制限された厳しい時代に私は少女期を送った。戦争が苛烈になると男たちは戦場へ駆り出され、子どもや女たちは迫りくる敗戦の足音におびえた。既に日本には飛行機の燃料なく、軍艦は特攻作戦で消え去った。決定打は広島原爆…。死の灰は人間の細胞を破壊し、母親の胎内で被爆した胎児さえ後遺症を脳や骨に刻み、生れ出る人生を奪い去った。

あの太平洋戦争に対する反省は、連合国による極東国際軍事裁判で指導者のみが戦争犯罪を裁かれて終わり、アジアに対する日本の戦後責任は関心の外に置かれた。また昭和20年8月に見



たキノコ雲も、戦後人々は豊かさを求める余り日々記憶から薄れていく。しかし終わりの思った死の灰は、相次ぐ核実験や原発事故によってその後も降り注ぎ、新しい何十万人もの被害者を生んだ。

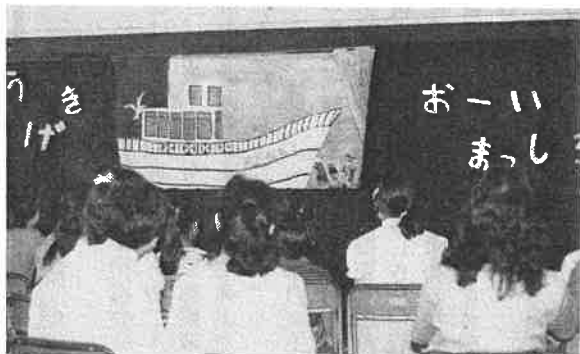
過去45年を通じて、世界の観客たちにまさしくヒロシマの悲劇が起こっていたのだ。私たちはそれをつい最近まで知られることがなかった。核抑止力の名のもとに米ソ両国は軍拡競争に明け暮れ、日本もまたアメリカの核の傘に隠れて平和への夢を食った。

私は「原爆の子・百合子」、「山口のヒロシマ」など一連のドキュメンタリーを制作し、人間の尊厳とは何かを訴えてきた。もし私たちが地球を核による破壊から救うことができるのなら、それは一人一人の志だ。ドキュメンタリーは、志を持つ人々へのエールを送るべく本来神の摂理の一部を追い求め探すものだとは私は考えている。

(山口放送・テレビプロデューサー)

平和の願いをこめて 文化祭で人形劇を上演

樋口 義博



「おーい、まっしろぶねーノ元気で行ってこいよー！」…生徒の声が教室の中に響きます。画面の中を大きな白い船が移動していきます。

これは、高校の文化祭でのひとこま。私の勤務する文教大学付属

高校は、東京の品川区にある女子校。生徒の自主的サークルである「平和アピール起草委員会」が、九月二十二・二十三日に行われた文化祭(白蓉祭)において、紙人形劇で「おーい、まっしろぶねー」(第五福竜丸物語・山口勇子原作)を演じ、大好評を博しました。

私の学校では、三年前に私の社会科の授業をきっかけに生徒達が自主的に「平和アピール起草委員会」を結成。ビキニデーに向けて一年生全員の360人が一人10センチ四方を担当して毛糸で第五福竜丸をデザインした巨大編み物の「平和アピール」を作りあげました。

現在、この編み物は第五福竜丸展示館にたくさんの千羽鶴に囲まれて飾られています。

以後、委員会は後輩たちが受け継ぎ、三年間にわたってさまざまな活動を続けてきました。今回の文化祭での人形劇もその活動の一つ。委員会の文化祭参加は今年で

三回目。今年はユニークなものという生徒達の発案により人形劇をやることに決定。遠藤真澄さん(高2)が台本を作り、一年生から三年生の約15名のサークル員が毎日暗くなるまで紙人形を作り、背景の絵を描きあげました。そして、効果音や音楽入りの素晴らしい舞台ができあがったのです。

当日は狭い舞台裏で汗だくになりながらの人形を操っての大奮闘。この人形劇は特にちびっ子達やお母さん達の人気の的。たくさんの人が熱心に観劇し、上演終了のたびに拍手喝采。大きな感動を呼びました。

文化祭では、期間中だけ展示館から里帰りした「毛糸の平和アピール」や委員会の活動を伝える写真、それにビキニ事件に関するパネル、高校生の平和意識アンケート調査の結果なども展示。多くの人が感心しながら熱心に見入っていました。

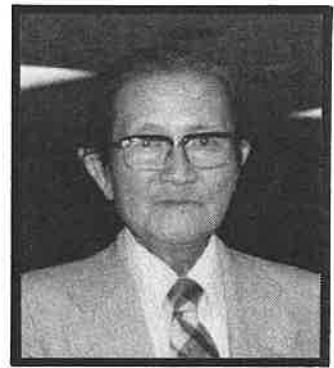
今回のとりくみの中で、いかに生徒達がいまいきと活動したか、いかに子ども達の眼が輝いて見えたか、私も生徒達と共にあらためて大きな感動を覚えました。

(文教大学付属高校教諭)

各地の文化祭に第五福竜丸今年も中学・高校の秋の文化祭に第五福竜丸の展示組写真真が活躍福竜丸の模型と共に実りある「航海」をしました。

墨田区の鐘淵中学校は、ビデオテープに収録した見学の模様を上映、組写真と共に、ベニア板で作った大きな福竜丸の模型を展示し、文化祭の目玉となりました。葛飾区の一之台中学校は、展示館見学のあと、クラスの代表約二十人が、一人一質問の矢を職員に浴びせ、学習の成果を発表しました。八王子の由木中学校でも展示してある広島投下原爆の実物大模型の寸法をはかり、学園祭でみんなで作った模型を展示しました。杉並区の豊多摩高校、上尾市の瓦葺中学校品川区の文教大付属高校の文化祭でも組写真真は活躍しました。

久保山忌句会十年の作品集
毎年九月二十三日に行なわれている「久保山忌句会」の十年を記念して小さな手づくりの作品集が発行されました(A5判・16頁・二百円)。この間、亡き久保山さんの心に添えるようにと詠まれた百人、三三四句が収録されています。



三宅泰雄第五福竜丸平和協会会長は、十月十六日午後十一時二十分、呼吸不全のため、東京都武蔵野市の武蔵野赤十字病院で死去されました。八十二歳でした。

三宅会長は、一九五四年のビキニ水爆実験以来、死の灰の分析、影響調査はじめ放射能問題に取り組み、死の灰の恐ろしさを世界に訴え、原水爆禁止を求める科学者の運動、第五福竜丸の保存運動の先頭にたてられました。

日本学術会議では、原子力問題特別委員会委員長を務め、「自主・民主・公開」の原子力平和利用三原則の再確認を政府に求める勧告をまとめられました。

三宅泰雄第五福竜丸平和協会会長逝去

一九六九年、第五福竜丸保存の訴えを、美濃部亮吉、中野好夫氏ら八名の方々とともにされ、結成された第五福竜丸保存委員会の代表委員、一九七三年の財団法人第五福竜丸保存平和協会設立以来会

甲 辞

三宅泰雄先生はすぐれた科学者であると同時に、深いヒューマニズムにうらうちされた人間の魅力にあふれた方でした。

科学者の社会的責任と人間愛、平和主義に徹し、ビキニ水爆被災事件直後から、原水爆禁止を求める科学者の運動で、指導的役割を果たしてこられました。

「第五福竜丸は人類の未来を啓示する」

先生はつねづね、そのようにおっしゃられ、その保存運動において、当初から中心的存在でした。ひろい運動と世論に支えられ、東京都の理解も得て、一九七六年に、第五福竜丸展示館は誕生しました。その管理、運営に当たる財

長を務められました。

「第五福竜丸は人類の未来を啓示する」——そのことばのなかに保存運動の思想・哲学がありました。

一九七七年、原水爆禁止運動の国民的統一を訴えた五氏アピールの一人であり、同年のNGO被爆問題国際シンポジウムなどに大団団法人 第五福竜丸平和協会発足時からの会長を三宅先生は勤めてこられました。

このような平和教育の貴重なよりどころを実現させるうえで、三宅先生は大きな貢献をされました。

学問的業績と社会的実績に裏付けられ高い見識、冷静で的確な判断力、頑固なまでの民主主義的運営の徹底、執念にもた問題追及の意欲。私たちは実に多くのことを教えられました。

展示館の前の記念碑には、三宅先生の筆で「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」との、久保山さんの言葉が刻まれています。先生には、展示館をいつまでも見守っていただきたいと思えます。

すでに百万をこえる人々が第五

な貢献をされました。

十月十九日、文京区の日本基督教団弓町本郷教会で行なわれた葬儀・告別式には、気象、海洋、地球など多方面の学会、大学、門下生、原子力、福竜丸の関係者多数が参列、協会からは本多喜美副会長が、告別の辞を捧げました。

福竜丸展示館をおとすれました。そして、これからも、もっと多くの人々、とりわけ若い方々がここをたずね、感銘をわかちあい、心の中に平和の火をともしることになるでしょう。

三宅先生の教えをかたく守り、先生がやり残された平和の仕事に継承、発展させることは、わたしたち残されたものに課せられた大きな責任です。

わたしはいま、三宅先生に対する感謝と哀惜の気持でいっぱいです。

三宅泰雄先生、どうか安らかにお休み下さい。

一九九〇年十月十九日
財団法人 第五福竜丸平和協会
副会長 本多 喜美



平和随想 (46)

三宅 泰雄

私をはじめアメリカを訪れたのは、一九五六年のことでした。行ったところは、サン・ディエゴ市の郊外のラ・ホイヤにあるカリフォルニア州立大学スクリッパス海洋研究所というところでした。当時としては滞米日本人の数は少なく、とくに家族をつれて滞在している人は、珍しいころでしたが、私は住居が決まったときに、妻と娘を呼び寄せました。その住居は、所長のロージャー・レヴェール博士の邸内にあり、アメリカにおける私たちが親子三人の最初の家でした。

その頃は、米ソのさやあてが一応おさまり、いわば平和な時でした。研究所には著名な海洋学者が多くいましたが、中でも有名な人はグスタフ・アルレニウス博士一家でした。グスタフはスウェーデン人で、ノーベル賞をもらったス

ヴァンテ・A・アルレニウス博士(一九〇三年、化学賞)の孫でした。グスタフの夫人のジュニーはフォン・ヘヴェシイ博士(一九四三年、化学賞)の娘でした。アルレニウス一家とはそれ以来、大変親しくしていただきました。一九七〇年、東京で開かれた「水地球化学・生物地球化学国際会議」(私は本会議の組織委員長)には一家を上げて来日され、東京でふたたび楽しいときを過ごすことができました。研究所には、その他にも優れた多くの科学者が充満していました。

私をスクリッパス海洋研究所に招いてくれたのは、ノリス・レイクストロウ博士でした。博士は海洋化学研究の先駆者であり、スクリッパス海洋研究所の観測船「ベアード」号の観測隊長として、またその他でも何度か来日されました。夫人のヘーズルさんも一カ月あまり、東京の私の家に滞在されたこともありました。その頃、ノリスはカリフォルニア大学サン・ディゴ・キャンパス大学院院長であり、孤児を二人まで養子にしていました。彼は私のことを大変大事にしてくれ、夏には私たちを

近くの砂漠に連れて行き、三日間も滞在する機会を与えてくれました。ラ・ホイヤに滞在した日本人研究者・留学生の誰もが、大変お世話になった先生です。

そのうち、パサディナにあるキヤルテク(カリフォルニア工科大学)の地球化学専攻のハリソン・ブラウン博士からも是非にと要請があり、数カ月間客員教授としてパサディナに移りました。娘はやむをえず、パサディナの学校に転校することになりました。ブラウン博士は、当時、アメリカ全体の地球化学の指導者でした。

その頃は、まだ我が国では、地球化学は発展途上にありました。これに対し、アメリカでは少壮の学者としては、ハリソン・ブラウン博士をはじめ、若手の秀才が多く、活気に満ちあふれていました。

帰国後、日本学術会議では一九六七年から七八年の四期十二年間、会員として原子力特委、海洋研連委の委員長、第四部副部長を歴任しました。また数多くの国際会議の役員をつとめ、一九六六年には第十一次太平洋学術会議を東京大学を舞台として、国の内外から約六千名が参加した戦後初の最大規

模の国際会議を開催しました。

平和運動、科学者運動では一九五八年以来、バグウォッシュ会議に参加。日本科学者会議発足以来の代表幹事。原子力問題情報センター代表理事。原子力安全研究協会理事。一九七七年の原水爆禁止運動に関する五氏アピールの一人。一九七七年、東京・広島で開かれたNGO被爆問題国際シンポジウムの代表委員として力を尽くしてきました。

一九七五年、米国政府出版物「The Natural Radiation Environment II」の第一巻、第二巻が退官記念論文集として私に献呈されたこと、さらに私の古稀を記念して、一九八〇年、カルフォルニア大学のゴールドバーグ教授らの編集により「Isotope Marine Chemistry」(内田老鶴圃)が出版されたことは大変うれしいことでした。

ここでは、私の初のアメリカ行きのことを記述しましたが、この後、私は国連関係の会議の日本代表として、また他の国際関係の会議や学会にも、多く出席することになりました。いわば私の国際活動の序論がこのころ、始まったということができます。 (十月十日遺稿)